

—ただキリストと共に歩む—

# 水戸無教會

第8号

編集 半田梅雄

## あきらめと希望

石原秀志

あきらめとは望みを棄てる事である。曠野のイスラエルの「私たちは飲み食いしようではないか。明日もわからぬいのちなのだ。」という呟きも、生の望みを棄てた人間のすてばちな態度であつた。凡そ人生をあきらめる時には、其処にある生は唯単なる慣習であり、死という未知なるものへの漠然たる恐怖である。

故に凡そ自覺的に生きようとする者は何等かの意味で希望に支えられる。原子力の威力の前にあきらめに近い恐れを抱きつゝ、尚その平和的利用に望みを繋ぎ、被圧迫民族や階級の惨めさと苦悩を知つて、あらゆる危険を冒しつゝ解放の

日を目ざして戦を続ける。人間理性の窮極の勝利に彼等の根柢がおかれてゐるのである。

それではキリスト教は一体希望を与えるであろうか、それともあきらめか。アメリカの黒人はキリスト教によつてその苦悩をあきらめる事を知つたと人は説く。しかしそれは「キリスト教」ではあつても、イエス・キリストの父なる神への信仰ではない。聖書の示す信仰は「望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認する事である」。

「望んでいる事がら」とはロマ書の記す如くに「神の栄光にあずかる事」であ

る。そして被造物自身にもまたそのような栄光に入る希望が残されてゐるとパウロは語つた。

人間の理性、人間の意志によつて支えられた希望も希望である。けれども福音—イエス・キリストに於ける神の愛—に生きる者の希望は、此の世と世にある人間とを全く新しく為し給う方に対する信頼によつて支えられた希望である。人間が人間や自然の支配者となる希望ではない。人間と共に全宇宙が新しくされる希望である。そして此の望みに生きる時に、望み得ないのに尚望み、途方にくれても行詰らない希望を失わないのである。

# 異邦人ヨブ

―ヨブ記研究(二)―

大森孝夫

ヨブ記の主人公「ヨブ」とは如何なる人物であつたでしょうか。ヨブ記の冒頭、一章一節の前半は先づ彼を「ウヅの地にヨブと名づくる人あり」と紹介しております。ヨブ(Yob)というヘブル語の名前の語源的意味に就いては(一)「敬虔な人」(二)「攻撃する人」(古い教理を等、学者は幾つかの説を挙げておりますがこれ等はヨブの性格、生涯から後から引出されたものが多く充分な根拠はないとされております。然しそれ等の細い探索よりも私たちは彼がイスラエル以外の異邦人であつたという事を知るべきであると思ひます。彼の出生地「ウヅ」の地は、はつきり何処そこであると決定できません

んがイスラエルの本土以外の外国であつたことは明らかな事実であります。つまりこれまた学者によつて(一)エドム地方(ユダヤ地方の東南方、創世記三六の二〇、二一及び二八、哀歌四の二参照)(二)ユフラテス河の東方地方(創世記一〇の二三、二二の二参照)(三)ダマスコ地方などの三説が挙げられ、目下第一のエドム地方が有力な説とされておりますがいずれにせよ「ウヅ」はイスラエル本土以外の砂漠に近い地方(ヨブ記本文参照)であつたことは間違ひなく、そこに生れたヨブがイスラエル人でなく異邦人であつたことは確実なことであります。「異邦人ヨブ」、このことは重大な事です。なぜなら神の選

民たることを肉の誇りとし強い自尊心と誤れる信念を持ち異邦人を蔑視し彼等と同列同席し行動を共にすることさえ嫌つたイスラエル人が異邦人ヨブの物語を聖書の中に加えたといふことは正に驚くべき異例の事柄に属する事でありませう。エゼキエル書(一四の一四及び二〇参照)に依りますと「ヨブ」の名は「ノア」「ダニエル」と共に旧約三大義人の一人として義人の典型、敬虔なる者の代表者として挙げられております。エゼキエルは紀元前六世紀の預言者でありますからヨブの物語はその頃既に広くイスラエル人に伝えられて居つた訳であります。ヨブの言語に絶する苦難の物語、美しく崇高なる信仰の物語。さすがのイスラエル人も頭を垂れ、心を開き遂に聖書に加えるに至つたのであります。イスラエル人の頑迷と強い排他的選民意識、私たちはそれを良く

知つております。而してそれだけに彼等の聖書の中に「異邦人呼ヨブ」の物語を加えたという事は如何にヨブの信仰、ヨブ記の価値が素晴らしく、尊いものであるか、又人間苦の問題が普遍的永遠的なものであり、如何に人類のもつ最も深刻な思想であるかを知るのがあります。

以上今回の研究は「異邦人ヨブ」一章一節前半十五語を通して人類最深の懷疑を解決し私たちを活ける父なる神の御前に導くこのヨブ記が人類の至宝の書であることを改めて知り、私たちがその書を学びゆく恩恵を神に感謝するものであります。

# 聖霊のバプテスマ

使徒行伝研究 (三)

半田梅雄

聖霊によるバプテスマは何時、如何ようにして授けられるか、それは誰にもわからない。わけのわからぬのに待つことは確かに辛い。辛いけれども然し待たねばならぬ。勿論私たちは唯まんぜんと待つわけではない。使徒らがイエスより直接指導を受けたように、私たちは聖書によって少しでも多くの予備知識を蓄えて置く必要がある。そしてその日が来た時、今まで学んだ事が如何に生々と甦つて来るか期待してよい。その日のよろこびは、どんなに期待しても期待し過ぎるということはない。

では「聖霊」とはいかなるものかについて、直接イエスの言葉に耳を傾けてみよう。ヨハネ伝十四章十六節に、

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは眞理の御霊である。」

尚、同章の二十六節に、「助け主、すなわち、父が私の名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせるであろう。」

聖霊は助け主であり眞理の御霊である。キリストが私たちと共にいつまでもいて下さるように、神が与えるはたらきであり、力である。

私たちは既にイエスの十字架を知っている。若しイエスの言葉に誤りがなければ、イエスは私たちが彼のもとに置くために十字架につけられたのである。(ヨハネ一四の一―三)

「わたしは道であり、眞理であり、生命である。だれでも私によらないでは父のみもとに行くことは出来ない」(ヨハネ一四の六)

例えを引けば限りなくある。然し一応これで聖霊とそのバプテスマの意味がおぼろげながらわかった。果して道が、眞理が、生きて我々のものとなるかどうか

か、学びつゝ、祈り、祈りつ待つのみである。

一二節「それから彼らは、オリーブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある」

一見何でもない記事のようであるが、こゝにイスラエル人の特徴が表わされている。即ち出エジプト記一六・二九、ヨシヤア記三・四に基いて、安息日には城壁から二〇〇〇キュビト(約一・〇一軒)以上遠くえ出られなかった。使徒等もこの律法を守っていたのである。この律法が或意味でイエスを殺し、行伝を形造る底辺とも云うべく、極めて重要な問題である。

# 死

## 半田信子

聖書に「いちど死ぬことと死んで後さばきをうける事は、人に定められたことである」と記されている様に、此の世に一度生を受けたものは、やがて又此の世から、去つてゆかなければならない。人生は、僅かに五、六十年と言われているが、「死」は年令、境遇、その人の都合など一切おかまいなしに、何の前ぶれなく不意に、やつて来る事が多い。そしてどんなに偉い人でも、すぐれている人も、又反対にどんなに世の人々から、軽んぜられようとまれている様な人であつても、誰でもが必ず何時かは直面しなければならぬ

事なのである。従つて「死」は多くの人々から、嫌われ、おそれられ、縁起の悪い言葉として取り扱われている。多くの財産、地位、名誉、或は愛する者、親しい者達から、無理矢理に引き離し、連れ去つてしまふ死は、確かに恐ろしい響をもつ語であるに違いない。しかし聖書に記されている「死」は一般に考えられていた様なものではなく、次の三つの意味をもつており、我らの主キリストの死と復活とによつて、その死の刺はとり去られ苦痛なく、最後の復活によつて全く此の権に勝つことが出

来ると約束されているのである。

- 1、肉体と灵魂とを分離すること。(創世記二五の十一、ヨブ三四の一四、一五、伝道の書一二の七)
  - 2、罪の権下にある灵魂の状態を指す。(エペソ二の一、五の一五、ヨハネ一の書三の一四)
  - 3、永遠の刑罰(ヤコブ五の二〇、黙示録二の一、二〇の六、二一の八)
- 凡て彼を信じ、彼にまかせ、彼を愛してこれに従う者は、皆此の恵みに与り救はるゝことが出来るのである。内村先生は愛する娘の死に際し、大声で「万才」を叫ばれたと伝えられる。此の世の戦を終えて、神のみもとに凱旋したその娘の為に「たとえ肉体に於ては、暫時相離れる時はあつても、やがて神のみもとに

て再会が出来るのである。キリストの愛によつて、希望が与えられ、死の恐怖と悲しみは、すっかり拭い去られるのである。

われ確く信ず、死も生命も、御使も権威ある者も後あらんものも、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむる得ざることを。

十三年前、幼いながらキリストの愛にならつて、その兄弟のために生命をすてた姉の、召天記念日を迎へ、私も又、多くの実を結ぶところの一粒の麦でありたいと深く思うものである。

## 来 信

前略、水戸無教会五十七号迄御送付下され感謝に堪えません。今迄の各号もずっと読ませて貰いましたが、今回は特に感銘を受けました。人間は何かにすがって生きてゆかなければ己れに恥ぢない生き方は出来ないことを痛く思い知らされました。毎号の中から私は知らず知らずのうちに、何かを吸収しています。神、クリスト・イエス、難解な専門語、とても理解し盡されず歎息しております。昨年冬の夜新宿駅頭で、伝道者から貰ったヨハネ伝福音書をかバンの中

### 兄から弟へ

に常時入れて時折り電車の中などで読んでみるものゝ基礎的な心が出来ていない為、何もわからないといつていゝ有様です。

無教会の印刷のずれで、文字の不明な箇所が時々あり、とても気になります。分らない文章なんだから、上位二文字並び三、四行位のすつ飛びなどに神経を使う必要もない筈なのに、自分の想像で欠字を綴つて読むのが惜しまれて来て、焦ら立たしくさえなります。えい兄の我儘かもしれませんが。

私が従来いだいていた「ヤソは嫌いだ」という気持は、このわずか数葉の印刷物によつて洗い流されそうでヤキモキしています。兎に角私はゆつくり考えて見たいと思います。結論が十日後否十年後でもいいから此のグラツキの拗つて来る根本から掘り下げて、何かを求めきづいて見たいと思います。

無教会一、二、四号を何処かえ失つてがっかりしました。多分新聞と一緒に片付けられたものでしょう。今日以後のものは失うまいとして綴りを作りました。題して「教養の書」(水戸無教会)と。

子供や私達の寫眞を新旧取りまぜて送ります。とき

子さんにくれぐれもよろしく。小遣でもためて一度日曜集会にゆける心境まで出世出来るといゝんだがと、しみじみ思いながら筆をおきます。

季節の変わり目故かぜに注意して下さい。

さよなら

## 返 信

### 弟より兄へ

嬉しいそしてなつかしいお便りと寫眞とを有難う御座いました。素晴らしい水戸無教会の読者が出来て、実によろこびです。印刷についての御忠告も有難いものでした。これはやはり印刷に対する考え方が、一人一人の読者と直結している為だと思えます。刷る時は百数十枚でも読む人は常

に一人づゝだということ私たちは忘れ勝です。

すべてが機械的で、すべてが大量生産的な。すべてが社会集団的で。すべてが没個性的な、そういう魔物が私たちを押しつぶそうとしている。それが今の世の中であるのかも知れませんが。余りに人間の個性(一人一人の生命と人格の尊厳)が、社会集団の恣意にふみにぢられつゝあります。集団の意思は全く暴力的で貪欲です。それは資本主義に名をかりても、社会主義に名をかりても大した差はありません。若い文化人達が主体性の確立を叫んでいるのは、そういう魔力に対する抵抗と見ることは出来ないでしょうか。

集団と共に唯機械的に、規格の家に住み、規格の着物を着て、定量のパンを食

べる。それが人類の理想と云えるのでしょうか。なんという貧相な夢でしょう。

人間はそれ程つまらない蛆虫的存在でしょうか。唯犬のように生殖して、豚のように食べる為の存在でしょうか。然し残念ながら私たちはそのように飼い慣らされ、そのように訓練されつあります。もともと私達の本性がそれを好むが如くでもあります。

それなのに何故、私たちは悶え、悩み、且抵抗試みたりするのででしょうか。

自分たちが集団としては貪欲を暴力的にふるまいながら、個人としては何故これとたゝかうようになるのでしょうか。

問題がこゝにあると思うのです。解答はいろいろの人から出されています。然し私たちはその殆んどに満

足することが出来ません。何故なら解答者の多くは口先丈の解答で、彼自身の人生に新しい生き方を示しておりません。勿論単なる出家隠遁によつて完全な解決が出来ないことは日本の佛教を見るまでもなく自明でしょう。

新しい人生、新しい人間とは何であるか、彼は何よりもこの混乱の世に、即ち俗世の中に俗人として生きてゆく人でなければなりません。然も彼は、社会集団の暴力に対してたゞ無茶な抵抗する街の英雄ではなく、社会集団の暴力も遂に彼を犯すことの出来ない毅然たる権威の中に住む者でなければなりません。

集団の暴力は、戦争であり、飢餓であり、恐怖であり、失業も就職難も生活の不自由も、享楽の誘惑

も、社会集団の暴力によつて個人に迫る恐威です。何人がよくこれに耐え得るか、例えば享楽したい誘惑が私に迫る。この時、私は何によつてこれを脱すべきか、それにはそれ以上の力、それ以上のよろこびや平安が私を支えてくれなければ、到底不可能です。その時私たちはナザレのイエスを仰ぎみるのです。彼は遂に何ものにも負けなかつた。死さえ彼を滅すことが出来なかつた。然も彼がそれらに打ち勝つことが出来たのは、強大な軍力の上に立っていたからでもなく、此の世の王者であつたからでもなく、勿論経済的に特に恵まれていた為でもありません。

彼は全くの空手、空拳で、単身よくこれに耐え、遂に勝ち抜くことが出来ま

した。それは彼の意志の力でしようか、いゝえ意思ではありません。完全に理性的な人間があればともかく、私たちは自分の貧しい体験からも、理性や意思の力で、人は社会集団の暴力、環境の支配から脱れることは不可能であることを知っています。イエスの勝利は、実に単純に（あらゆる複雑を超えて）神の子としての自覚と、それ故に父なる神に対する絶対的な従順に因るものでした。私たちは一九〇〇年間の歴史の中に無数にイエスと共に生き抜いた人々を知ることが出来ます。

それは同時に私にとって  
は体験であり、今全世界には  
実に無数の人々が、イエス  
のこの事実を信ずる信仰  
によって生かされ、且生き  
つゝあると思うのです。神  
と云い、キリストと云い、  
仮に在るとして信ずる假定  
の対象ではありません。彼  
らにはすべてそれが生ける  
同一の事実であり、飯を食  
べ、働き且眠ること以上に  
確かなことです。

よしんば現実的には病人  
であり、貧乏人であり、生  
活に敗れた如き者であつて  
も、神により、キリストに  
あつて、常に勝利の人こそ  
キリスト者の別名と云つて  
差支えありません。

よつて滅びることのない価  
値ある人生こそ望むべき最  
高の理想といえましょう。  
「それでは、これらの事に  
ついて、なんと云おうか。  
もし、神がわたしたちの味  
方であるなら、だれがわた  
したちに敵し得ようか。ご  
自身の御子をさえ惜しまな  
いで、わたしたちすべての  
者のために死に渡されたか  
たが、どうして、御子のみ  
ならず万物をも賜わらない  
ことがあるうか。だれが、  
神の選ばれた者たちを訴え  
るのか。神は彼らを義とさ  
れるのである。だれが、わ  
たしたちを罪に定めるの  
か。キリスト・イエスは、  
死んで、否、よみがえつ  
て、神の右に座し、また、  
わたしたちのためにとりな  
して下さるのである。だれ  
が、キリストの愛からわた  
したちを離れさせるのか。

イエスは、十字架上に惨死することによって、全人類に神の實在を明らかにし、然も全人類が、イエスの如く義しき人を十字架上に追いやる罪惡の張本人であることも明らかにされました。

一体私たちは努力によって義しく生きることができるのでしうか。

また書きます。御元気を祈ります。

さよなら

## 後記

夏期聖書講習会記録が出来上り、参加者は勿論、思いながら参加出来なかった兄弟姉妹たちにお届けすることが出来て、何よりも嬉しかった。昇天された森田

隆夫兄もさぞかし満足して下さったことであろう。記録を手にして、この講習会のもたらした賜物は実に限りなく豊富であったことを、しみじみ思う。人間の記憶は毎日に薄れてゆく。

それに反して、この御講義に盛り込まれたガラテヤ書の精神は、黒崎先生の深い、広い、そして強い御信仰と共に永久に消えることはないであろう。早速多くの方々から丁寧な御礼状を頂いて感謝に堪えません。ここにあるすべてのものは神さまのみこゝろによつたものばかりであるが、何と云つても黒崎先生に対しては感謝で一ぱいであります。尚この編集のために自分でも読み難いようになつた

ない記録と取組まれ、全力を盡して再現に努めて下さった大森兄にはほんとうに御苦勞様でした。なお残部がありますから希望者は申し込んで下さい。

小貫兄が十月初旬原因不明の熱病にとりつかれ、一時は四十度を超す高熱で、御家族のご心配は大変だつた由、幸全快も近いと聞いてほつと安堵した。周囲殆んど利害の算盤の中にあつて、兄の苦斗もさこそと思いやられるが、重荷を背負う者はそれ丈、神に愛せられるものであることを思つて、兄の健斗を心より祈る。

杉の秀に鴉は高鳴き、無果樹の葉をひるがえしていつた颱風の後に、既に秋

冷はしのび寄っている。深みゆく秋、すべてものゝ懐かしき秋、聖書研究の秋、祈りの秋、そして私たちにはいよいよ強きたゝかいの秋でもある。(半田)

### 日曜集会

毎日曜十一時から集会をしています。自由に参加してください。

ルツ記研究

大森

水戸市東原町四六四二

水戸幼稚園

昭和三十年十月 発行

水戸無教会第八号

実費十円千共

編集兼印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原町四六四二

水戸幼稚園内

水戸無教会